

オリンピック開会式に見るオリンピック教育の理念

○舛本 直文(首都大学東京)

キーワード: オリンピズム、オリンピック・ムーブメント、祝祭性、儀式性、教育性

研究の動機

オリンピックの開会式は、いよいよスポーツの平和の祭典が開始されることを告げるセレモニーである。それは、参加者のみならず、スタンドの観客にもテレビの視聴者にもそのような祝祭気分をもたらすものでもある。つまり、今まで生きてきた日常的空間との区切りを示し、新たな祝祭の時空間の到来を予告する儀式なのである。文化人類学的に言えば、このオリンピック開会式は、新たな時空間生成のための境界性を創出する文化的仕掛け、ということが出来る。逆に閉会式は、オリンピックの祝祭空間から再び日常空間へと移行していくための仕掛けということになる。

しかしながら、オリンピック開会式で発信される様々なメッセージや意味に関する研究はあまり見られない。1995年にIOCとバルセロナ自由大学が共催し、MoragasやMacAloonらが仕掛けたInternational Symposium on Olympic Ceremoniesというシンポジウムが初めてのオリンピック開会式に関する研究であろう(報告書がIOCから刊行されている)。また、Roel Puijkは1994年リレハンメル冬季大会の開会式でノルウェー文化の創成について述べている(1999)。このような開会式への関心が少ない研究傾向は、オリンピック・スポーツ・イベントの競技性、つまり、誰が勝つか、誰が金メダルを取るか、ということにしか関心を示さないメディアと視聴者の共犯関係が関与しているのかもしれない。しかしながら、1998年長野冬季オリンピック大会の開会式で活躍した「雪ん子」たちのように、子どもたちが開会式に直接参加し、オリンピックの精神に触れ、世界の文化と交わることは、その子どもたちの記憶に一生残る、重要な経験となりうる。また、子どもたちが開会式に直接に参加しなくても、スタンドの観客としてまたテレビの視聴者として教育的なメッセージや意味を理解して、今後のオリンピック・ムーブメント推進の担い手となってくれることが大いに期待される。

日本の現状を見渡せば、日本メディアの関心は、オリンピック開会式の祝祭性、儀式性、開催都市や国の文化性、我が国のアスリートの動向などへ向かうといっ

て良い。しかしながら、世界的な動向へと目を向ければ、平和運動や教育運動としてのオリンピックへの関心が重要であるといえる。この観点からすれば、オリンピック・ムーブメントの再生産装置(教育機能)としての開会式への着目することは重要であると考えられる。それは、子どもたちこそ未来のオリンピック・ムーブメントの担い手であり、オリンピックへの夢、世界平和への貢献の可能性を持った存在者であるからである。

研究の目的: 開会式におけるオリンピック教育的次元とその理念やメッセージを明らかにし、今後のオリンピック・ムーブメントの展開に向けて有効な示唆を得ることである。

研究の方法

過去のオリンピック開会式の状況把握はAAFLAのオリンピック文献サイトなどを利用した文献研究によった。2000年のシドニー大会以降の開会式については、現地調査のフィールドワークおよびNHKのテレビ中継のVTRを中心に分析する。併せて、IOCのwebからの情報収集しながら、オリンピック開会式の教育的次元の持つメッセージの内容分析を進めていく。

研究の概要: オリンピックの開会式で伝えられるメッセージ性には現時点では次のようなものが考えられている。

- 世界最大のスポーツイベントとしての祝祭性
- 厳粛な宣誓などの宗教性
- 開会宣言や国歌斉唱・国旗掲揚などの儀式性
- 世界最高のスポーツ競技会開始という競技性
- 地域文化の発信という文化性
- その国や都市の持つ最新テクノロジー(技術性)
- 「平和の祭典」という政治性
- 子どもの参加とオリンピズムの普及というムーブメント性(教育性)

結果

オリンピック開会式の各種イベントには教育的理念が多極面に亘って見られる。その教育理念を直接的・間接的にオリンピック教育として展開し、未来のオリンピック・ムーブメントを展開する可能性が示唆された。

torino 2006 ATHENS 2004

オリンピック開会式に見る オリンピック教育の理念

舛本 直文
首都大学東京

KW: オリンピズム、オリンピック・ムーブメント、
祝祭性、儀式性、教育性

2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 1

torino 2006 ATHENS 2004

研究の動機

- ▶ オリンピック開会式: スポーツの平和の祭典が開始されることを告げるセレモニー
- ▶ 参加者、スタンドの観客、テレビ視聴者に、そのような祝祭気分をもたらす
- ▶ 今まで生きてきた日常的空間との区切りを示し、新たな祝祭の時空間の到来を予告する儀式
- ▶ 文化人類学的:
オリンピック開会式=新たな時空間生成のための境界性を創出する文化的仕掛け
オリンピック閉会式=オリンピックの祝祭空間から再び日常空間へと移行し、戻っていくための文化的仕掛け
(ファン・ヘネップ: 通過儀礼)

2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 2

torino 2006 ATHENS 2004

日本の現状: メディアと視聴者と子ども

- ▶ オリンピック・スポーツ・イベントの競技性: 誰が勝つか、誰が金メダルを取るか、ということにしか関心を示さないメディアと視聴者の共犯関係
- ▶ 1998年長野冬季オリンピック大会の開会式:
「雪ん子」→子どもたちが開会式に直接参加し、オリンピックの精神に触れ、世界の文化と交わること: 子どもたちの記憶に一生残る重要な経験となりうる
- ▶ スタンドの観客、テレビ視聴者としての子どもたち: 教育的なメッセージや意味を理解し、今後のオリンピック・ムーブメント推進の担い手となってくれることが期待される

2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 3

torino 2006 ATHENS 2004

研究動機: 内外の状況と子どもの可能

- ▶ 日本の現状: メディアの関心は、オリンピック開会式の祝祭性、儀式性、開催都市や国の文化性、我が国のアスリートの動向などの競技性へと向かう
- ▶ 世界的な動向: それプラス、平和運動や教育運動としてのオリンピックへの関心を重要視
- ▶ この観点からすれば、オリンピック・ムーブメントの再生産装置(教育機能)としての開会式へと着目することは重要
- ▶ 子どもたちこそ、未来のオリンピック・ムーブメントの担い手であり、オリンピックへの夢、世界平和への貢献の可能性を持った存在者

2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 4

torino 2006 ATHENS 2004

先行研究(開会式への関心が少ない傾向)

- ▶ オリンピック開会式で発信される様々なメッセージや意味に関する研究はあまり見られない(舛本の一連の研究を除き)
- ▶ 1995年: IOCとバルセロナ自由大学が共催し、Moragas, MacAloonが仕掛けたInternational Symposium on Olympic Ceremoniesが初めてのオリンピック開会式に関する研究(1996年IOCから報告書)
- ▶ Roel Puijk (1999): 1994年リレハンメル冬季大会の開会式でノルウェー文化の活用とともにアイデンティティ形成について記述
- ▶ →教育的な関心は見られない
(Klausen[Ed.](1999)Olympic Games as performance and public event)

2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 5

torino 2006 ATHENS 2004

研究の目的

- ▶ 開会式におけるオリンピックの教育的次元とその理念やメッセージを明らかにし、
- ▶ 今後のオリンピック・ムーブメントの展開に向けて有効な知見や示唆を得ること

2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 6

研究の方法

torino 2006 ATHENS 2004

- ▶ 先行研究: AAFLAのオリンピック文献サイトで過去のオリンピック開会式に関する研究状況把握
- ▶ 2000年のシドニー大会以降の開会式: 現地フィールドワーク、およびNHKのテレビ中継のVTRを中心に分析
- ▶ IOCのweb siteから情報収集

→オリンピック開会式の教育的次元の確認とその持つメッセージ性の分析

2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 7

開会式のメッセージ性

torino 2006 ATHENS 2004

- ▶ 世界最大のスポーツイベントとしての祝祭性
- ▶ 厳粛な宣誓などの宗教性
- ▶ 開会宣言や国歌斉唱・国旗掲揚などの儀式性
- ▶ 世界最高のスポーツ競技会開始という競技性
- ▶ 地域文化の発信という文化性
- ▶ その国や都市の持つ最新テクノロジー(技術性)
- ▶ 「平和の祭典」という政治性
- ▶ 子どもたちの直接参加によるオリンピズムの体験(普及)というムーブメント性(教育性)
- ▶ オリンピックのもつ平和運動、異文化理解、国際親善、心身調和の全人教育などを理解する教育的好機

2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 8

開会式の子どもたちの直接参加

torino 2006 ATHENS 2004

- ▶ 過去4大会: 2000年シドニー大会、2002年ソルトレイク冬季大会、2004年アテネ大会、2006年トリノ冬季大会
- ▶ 独唱などの中心人物として1人で登場
シドニー、SLC、アテネ、トリノ
- ▶ コーラス隊、ダンスパフォーマンスのメンバーとして
シドニー、SLC、アテネ
- ▶ その他の引き立て役として
アテネのオリーブの小枝でオリンピック旗の出迎え

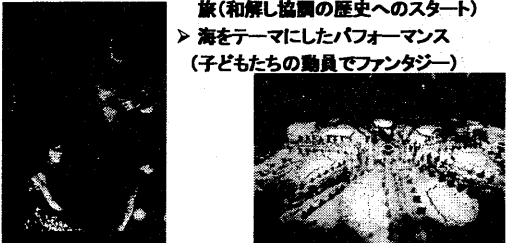
◎最近の傾向: 2000年シドニー以来、主人公的な子どもの存在(物語化=開会式のエンターテインメント化・ショー化)

2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 9

2000年シドニー大会

torino 2006 ATHENS 2004

- ▶ ウェブスター嬢とアボリジニの歴史的旅(和解し協調の歴史へのスタート)
- ▶ 海をテーマにしたパフォーマンス(子どもたちの勤員でファンタジー)

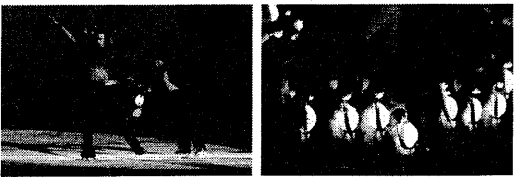


2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 10

2002年ソルトレイク冬季大会

torino 2006 ATHENS 2004

- ▶ Light the Fire Within(少年の主演)
- ▶ Child of Fireの子どもたち(ランタン持つ少女達)




2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 11

2004年アテネ大会

torino 2006 ATHENS 2004

- ▶ 折り紙風ボートに乗って登場したバタジャディス少年
- ▶ コーラス隊の少年少女: 古代ギリシャ風のコスチューム
- ▶ その他: オリーブの小枝をもった子どもたちがオリンピック旗を迎えてもいる



2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 12

2006年トリノ大会

torino 2006 ATHENS 2004

- 子ども: 国歌を独唱した9才のエオノラ・ベネッティ(直接体験)
- 空中に浮かぶ鳩(平和の象徴としての理解)
- エンディング: 大オペラハウス化 (パパロッチのトゥーランドット: 伊文化の理解)



2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 13

子どもの直接参加:
イメージ仮託と役割期待のための子ども論

torino 2006 ATHENS 2004

- 1. 比喩としての子ども(小さなもの、弱いもの、未熟なもの、無力なもの、無知なもの。あるいは、古い力を覆す新しい力を持つもの、新生、再生、神力などの象徴)
- 2. 育成としての子ども(人生の初期、その国の共同性(言語、慣習、規範)を獲得する過程としてあらわれる。育成者の理想とする共同性の理念に左右されている)
- 3. 体験としての子ども(本人によってしか生きられない1回きりの子ども体験。自由な空想・夢想・冒険・探検の世界を味わう独特の世界体験がある。大人が地上性とするれば天上性(至高の世界)や地下性(闇の世界)まで広範囲の世界を行き来するダイナミックな世界体験がある) (木田元徳編(1989)コンサイス20世紀風土事典、三巻)

2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 14

子どもの直接参加:
イメージ仮託と役割期待のための子ども論

torino 2006 ATHENS 2004

- 1. 白紙としての子ども(タブラ・ラサ): 子どもは無限に教育可能
- 2. 無垢なるもの、神性を宿すもの、真のヴィジョンを直感する力を持つもの
(廣松渉他編(1988)哲学・思想事典、岩波書店)
- テレビというメディアを前提にしたオリンピック開会式の子どもの出演には、
- 「時代の無意識の託宣が子どもの身体を借りて表現される」という立場が反映されていると考えられる
(木田和子(1985)映像の子どもたち、人文書館)

2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 15

子どもに仮託するイメージ

torino 2006 ATHENS 2004

- 子どもを「純粋無垢なるもの」として大人が仮託するイメージ: 夢、未来、希望、平和など肯定的なものが多い
- 純粋な喜びや楽しみなど、開会式の祝祭の現在を祝福する事も担われる
- 「純粋無垢」「非力の力、未知の知」「成長」等の託されたイメージによって、オリンピックの持つ負の側面を隠蔽してしまう可能性。
- 現代オリンピックの商業主義、政治性、テロリズムなどが祝祭と子どもに付託された肯定的なイメージによって後景に追いやられてしまう。
- 子どもたちの存在はオリンピックの理想だけでなく、光と陰の両面からとらえる必要がある。

2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 16

開会式: 種々のメッセージ性理解の好

torino 2006 ATHENS 2004

- 世界最大のスポーツショー(祝祭性・エンターテイメント性)
- 開催都市・国家の地域文化の発信(文化性)
- 開会宣言、国歌斉唱・国旗掲揚など国家のアイデンティティ形成(政治性の儀式)
- 選手・審判の宣誓など(宗教性・フェアのスポーツ精神性)
- 世界最高のスポーツ競技会開始(競技性)
- 選手団入場行進(国際親善・異文化理解)
- 開催都市・国家の持つ最新テクノロジー(技術性)
- オリンピック宗教(オリンピック旗入場・掲揚、オリンピック賛歌)
- 象徴的放鳩やオリンピック体験への言及(平和性)
- 聖火リレーと点火(平和性・技術性)
- 「4年に一度の平和の祭典」(平和性・政治性)

2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 17

結論

torino 2006 ATHENS 2004

- オリンピック開会式のパフォーマンスには、教育的次元が見られることが確認された
- 子どもの利用: 純粋無垢というイメージの利用→夢、未来、希望、平和
- 主人公的な子どもの利用=物語化、ショー化の現出
- 「子どもに付託した肯定的、未来的なイメージ」: 本当か? 可能か? 単なる利用か?
- 近年は子どもたちの不在が顕著に(テロの影響?)
- 子どもたちの開会式での直接的体験の保証が重要であろう
- 開会式の種々のメッセージ性を理解させる好機
- それらの教育次元を直接的・間接的にオリンピック教育として展開することで、今後のオリンピック・ムーブメントを子どもたちのレベルで展開する可能性が示唆された

2006. 11. 18 2006スポーツ教育学会 18